



作 円山 夢久 絵 もりた かず

冷房のきいたショッピングセンターの中を、あたしはのろのろ歩いてきた。明日から夏休みだっていうのに、何だかちっとも嬉しくない。

もちろん、ルナのことがあるからだ。

ルナっていうのは、先週うちに来た猫のこと。全身真っ白で、ふわふわしてて、あたしはひと目で夢中になった。だけど、ルナはもういない。たった一日うちにいただけで、すぐお店に返されてしまった。お姉ちゃんが、猫アレルギーだったことがわかったからだ。

お姉ちゃんは今年六年だけど、四年生のあたしより身体が小さい。うまくしゃべることも、思い通りに手足を動かすこともできず、特別な車いすで生活している。幼稚園のとき、車にはねられてから、ずっとそうだ。

お姉ちゃんはかわいそうだし、家族みんなで守ってあげなきゃならない。パパもママもそう言うし、あたしだってそれはわかっている。わかっているけど――。

時々、思うんだ。お姉ちゃんはいいなって。パパもママも、いつだって、お姉ちゃんのことしか見ていない。お姉ちゃんが入院すれば――お姉ちゃんは、しょっちゅう入院する――ママは病院に泊まりこみ、あたしはお祖母ちゃんちに預けられる。退院して家に帰ってきてても、ママはお姉ちゃんにつきっきりで、あたしはそんなママのお手伝いだ。夏休みくらい、あたしだって思いっきり遊びたい。だけど、今朝はママに、

「夏休みは、まゆちゃんがいてくれるから助かるわ」
なんて、先回りするように言われてしまった。